

第132回 日商簿記検定試験 1級 -工業簿記- 解説

模範解答・予想配点・解説等は、学校法人高橋学園が独自の見解によって作成しており、検定試験実施機関における本試験の解答並びに出題の意図を保証するものではありません。なお、予告なしにその内容を変更する場合がございます。ご理解いただいたうえで、ご利用ください。

問1 ※標準原価カードは9kg当たりで計算されているので、解答時に1kg 当たり直すことに注意。

標準原価カードを作成し、中間生産物Aの標準製造原価を求める。

中間生産物A			
原料X	600 円/kg	×	6 kg = 3,600 円
原料Y	900 円/kg	×	4 kg = 3,600
直接労務費	2,700 円/hr	×	2 hr = 5,400
製造間接費	1,800 円/hr	×	2 hr = 3,600
中間生産物A9 kg当たり標準製造原価			<u>16,200 円</u>

解答 16,200 円 ÷ 9 kg = **1,800 円/kg**

問2 原料Xの購入原料価格差異を求める。受入時に標準単価で記帳しているため、当月購入量に対して差異が把握される。

$$\begin{matrix} \text{標準単価} & \text{実際単価} & \text{実際購入量} & \text{購入原料価格差異} \\ ( 600 \text{ 円} & - 590 \text{ 円} ) & \times 12,000 \text{ kg} & = \mathbf{120,000 \text{ 円(有利)}} \end{matrix}$$

問3、問4 標準投入量の算定を行い、各原料の歩留・配合差異の分析を行う。

第1工程

標準投入量 18,500 kg	当月完了品 16,650 kg	完成成分 減損分 16,650 kg : X = 9 : 1 X = 1,850 kg
	標準減損量 1,850 kg	

	標準消費量合計	←比較→	実際消費量合計	←比較→	実際消費量合計
	標準配合割合		標準配合割合		実際配合割合
原料X	11,100 kg		11,400 kg		11,500 kg
原料Y	7,400 kg		7,600 kg		7,500 kg
	18,500 kg		19,000 kg		19,000 kg

歩留差異                      配合差異

配合差異：合計数量が同じであるが、配合割合が異なる。混ぜ具合のズレを表したものの。

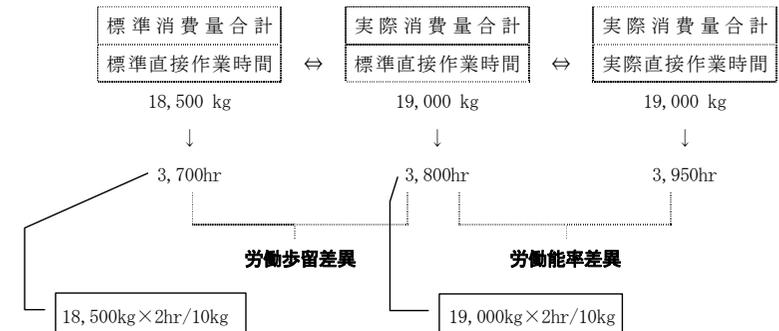
$$\begin{aligned} \text{原料X} & \quad (【標配】 11,400\text{kg} - 【実配】 11,500\text{kg}) \times 600 \text{ 円} = \mathbf{60,000 \text{ 円 (不利)}} \\ \text{原料Y} & \quad (【標配】 7,600\text{kg} - 【実配】 7,500\text{kg}) \times 900 \text{ 円} = 90,000 \text{ 円 (有利)} \end{aligned}$$

歩留差異：完成品数量は同量であるが、消費（投入）量が異なる。減損量のズレを表したものの。

$$\begin{aligned} \text{原料X} & \quad (【標消】 11,100\text{kg} - 【実消】 11,400\text{kg}) \times 600 \text{ 円} = \mathbf{180,000 \text{ 円 (不利)}} \\ \text{原料Y} & \quad (【標消】 7,400\text{kg} - 【実消】 7,600\text{kg}) \times 900 \text{ 円} = 180,000 \text{ 円 (不利)} \end{aligned}$$

問5 原価標準を1セットとして考え、労働能率差異、労働歩留差異を算定する。

$$\begin{matrix} \text{標準賃率} & \text{実際直接作業時間} & \text{実際直接労務費} & \text{労働価格差異} \\ 2,700 \text{ 円} & \times 3,950\text{hr} & - 10,680,000 \text{ 円} & = \mathbf{15,000 \text{ 円(不利差異)}} \end{matrix}$$



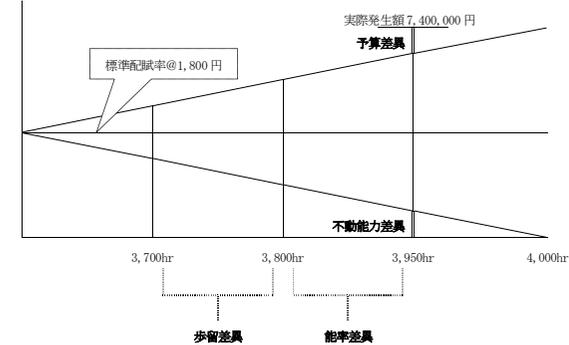
労働能率差異：材料加工（消費）量は同じであるが、その加工時間のズレ。手際が良いか悪いかの判断に使用。

$$(3,800\text{hr} - 3,950\text{hr}) \times 2,700 \text{ 円} = \mathbf{405,000 \text{ 円(不利)}}$$

労働歩留差異：完成品数量は同量であるが、減損量のズレからくる加工（消費）量のズレを表したものの。

$$(3,700\text{hr} - 3,800\text{hr}) \times 2,700 \text{ 円} = \mathbf{270,000 \text{ 円(不利)}}$$

問6 製造間接費については、下記の図をもとに各自算定すること。



問7 問1と同様に製品A1kg 当たりの標準原価カードを作成し、算定する。

$$\begin{matrix} \text{製品A原価標準} & \text{当月完成品数量} & \text{完成品総合原価} \\ 2,700 \text{ 円/kg} & \times 16,850 \text{ kg} & = \mathbf{45,495,000 \text{ 円}} \end{matrix}$$

問題2 原価計算基準 第1章6『原価計算一般基準』(二)7、8参照